



赤岳鉱泉から硫黄岳 石ゴロゴロの広い山頂

10月17・18日 南八ヶ岳

この山は赤岳から連なる稜線の一番北側にあつて、山頂一帯はゴロゴロの石と岩の広場のように、北側は打つて変わって大きな爆裂火口の跡

前回の八ヶ岳の主峰・赤岳登山から4ヶ月。今回も八ヶ岳の山です。ここも30年ほど前に登っているはずですが、ほとんど覚えていません。多くの登山者は赤岳鉱泉に一泊して横岳や赤岳まで足を延ばすようですが、私は硫黄往復のゆつくり登山。無理せずをモットーになんとか行ってきました。「超超スロー登山」です。登山道には大きな霜柱。山の上はもう冬の気配でした。

でめぐり取られた荒々しい山容を見せています。

山頂直下の赤岳鉱泉に泊まると頂上を目指す計画。1日目は赤岳鉱泉まで行けばいいので幾分気持ちに余裕あり？

午前10時過ぎに風路を出発。美濃戸口からデコボコ道を車でゆつくり走り、20分ほどで美濃戸の赤岳山荘。駐車料金2日分2000円を支払っていざ出発。



午前11時半、歩き始めてすぐに北沢に架かる橋を渡ると美濃戸山荘、すぐ前が前回登った行者小屋へ続く南沢の登山口。今回はここを通過、さらに奥へ続いている北沢林道を進みます。始めは道の両側はシラビソ、コマツガの針葉樹林。30分し

か歩いていないのに、林道脇で昼食(ちよつと早過ぎ?) コンビニで買ったおにぎりとパンです。このころから雲が晴れ、針葉樹の森の中に日が差し色づいたナナカマドが鮮やかに光って見えました。またしばらく登ると樹林が途切れて明るい白樺、ダケカンバの林の一角に出ました。再び針葉樹林の林道を歩いていくと、小さな広場のようになつていて、ここからいよいよ本格的な登山道です。

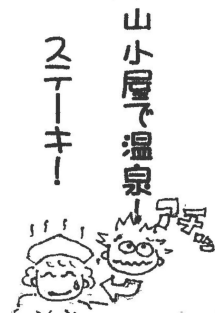
あれはアイスクャンディー?

「北沢」と矢印のある標識が架かる橋を渡って沢沿いの登山道を登っていきます。さすがに、このあたりまで来ると紅葉も進んでいます。カラマツはすっかり黄金色。何度か左岸、右岸を渡り返しながら登っていくと前方の樹林の奥から「カン、カン」と金属音が聞こえてきました。さらに進むと木々の間からパイプを組み立てている工事現場が見えてきました。

午後2時半、赤岳鉱泉の一隅に到着です。組み立てていたのは赤岳鉱泉の冬の名物「アイスクャンデー」。パイプに水を吹き付け凍らせアイスクリーミングの練習用の氷壁を作っていたのです。すぐ隣に赤岳鉱泉の建物のデッキがあ

り、数組の登山グループが休憩していました。

建物の中に入って宿泊の受付を済ませ、指示された「しおがま」という部屋に入りました。個室を希望したら、8畳ほどの広い部屋を2人で使っているそうです。さすがに寒い!と思つたら、部屋にはストーブがあり、スイッチを入れたら温かい風が出てきてほつとしました。



ステーキ!

受付のすぐ右隣に鉱泉のお風呂があり、午後3時から6時が入浴時間の張り紙。お風呂は8畳くらいの浴室に2畳ほどのヒバ(?)の木の湯舟。最初はあまりに熱くて湯舟に入ることを諦めて部屋に帰ってきたのですが、「バルブを開くと水が勢いよく出てきて、なんとか入れる熱さになった」という情報を聞いてリベンジ。しっかり浸かって温まりました。極楽、極楽。

午後6時夕食です。今日の献立は分厚い牛肉のステーキの陶板焼きでかぼちや、ピーマン、ナスの付け合わせ、サラダ、ご飯に豚汁。陶板焼きはボリュームたっぷり。山小屋の食事で本格的なビーフステーキとは!!もちろん、缶ビ

ス・ペ・イ・ン・巡礼 北の道 No.7 歩き旅のゴール ビルバオへ

2017

やっと見つけた素晴らしい宿ともお別れ、きょうは今回の歩き旅の最後の日。残りの日々は観光します。今回初めて歩いた北の道、最初は280キロ先のサンタンデルを目指しましたが、記録的な猛暑でダウン、1回休養して、約半分の150キロ地点のビルバオまで。(50キロほど電車で移動したので、実際に歩いたのは約100キロ)。きょうは15キロ歩いてゴールです。途中の道はほとんど記憶がありませんが、最後、坂を下りていくときに着陸する飛行機が見えたことを覚えています。やっとビルバオに着いても、予約した宿を探すのにひと苦労。

インフォメーションを見つけて、イルも♪ 部屋に戻って就寝準備。午後9時消灯。ストーブも切れてしまいました。夜中、寒くて毛布をもう1枚



おかわりー!

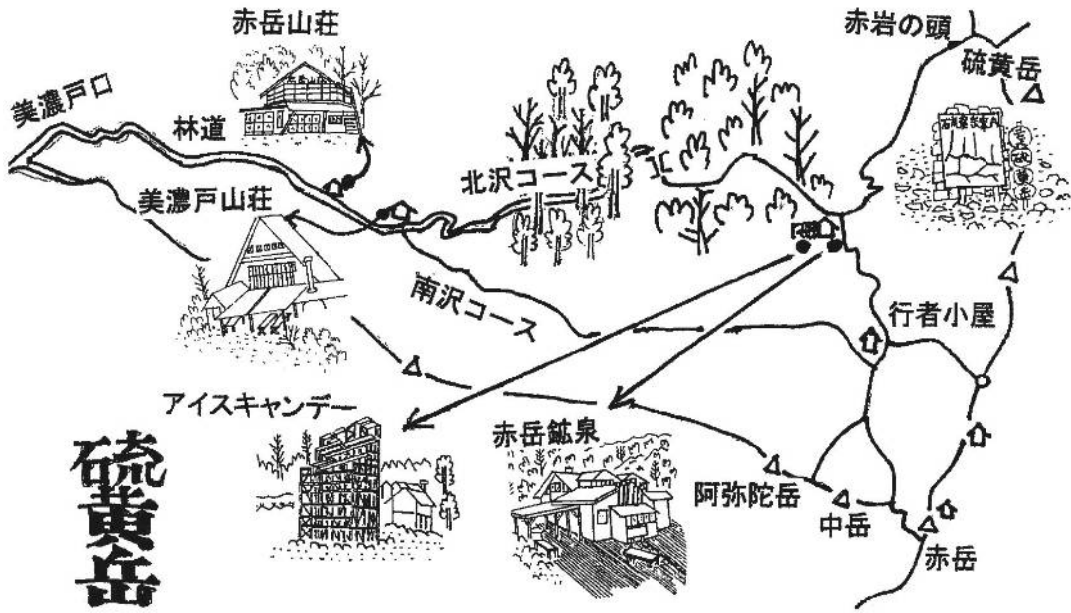
午前5時、小屋の電気が付き、起床。気温は3度。寒い! 部屋のストーブを点け、午前6時、朝ごはん。鱈の干物、キャベツのサラダ、焼き海苔、納豆、昆布の佃煮、タクアン、ウメガツオ、ナスとねぎの味

そこで探してもらいました。地図上で示してくれたのは西のはずれ、まだ2キロほど先です。バスがあるようですが、「ウォーカーですから」と見栄を張り? (バスの乗り方がよくわからない) 宿を目指して歩きました。アスレチック・ビルバオの大きなサッカールーに近いの安い宿で、止まるたびにガッタンと衝撃かおるエレベーターに毎回ビクツとしました。次の日はサッカールーを見学し、巡礼道の先を探索。帰国してから、「ビルバオに行ったならグッゲン・イム美術館は必見」という記述を見て、すぐ近くまで行っていたのに・・・とちよつと残念。また行けるかな?

それから、またサンセバスチャンで2泊。そしてサンセバスチャンから国境を越えてポルドーへ。コック周平の夢見たワインの町です。(つづく)

さつぷりさつぷり...

午前7時すぎ、さあ、いよいよ硫黄岳目指して出発。しかし! 最初登山口が分からず、ウロウロ。右は行者小屋へ向かう登山道だし・・・? 小屋の前でクライミングの準備をして うらへつづく



表からつづく
いた人に聞くと、小屋の正面から登っていく登山道を指さし「ここですよ」と教えてくれました。(硫黄岳への登山口の標識は小屋の入り口にあつて、それを見落としていたのです。下りてきたときに、見つけました。「あッ、標識がここにあつた」遅い・・・) ようやく、登山口に入り、樹林の中を二〇数分登ると小さな沢に出て、そこに「硫黄岳・大同心」の道標がたつていま

赤岩の頭までいいが...

した。
沢を渡りさらに登山道を登っていくと登山道の左手は北沢の谷が開けて、背後に阿弥陀岳、赤岳が迫ってきています。ほとんどシラビソとコマツガの針葉樹林の森で、中に見事に紅葉したナナカマド。急登が続きますがゆっくりゆっくり登っていくと前方の森が途切れてきて木々の間から空が見えてきました。

午前9時 30分、樹林を抜け赤岩の頭に出ました。実は、たいへんだつたら、ここまででもいいか、と思つていました。下りにも時間がかかるので「下りの体力もとっておかないと」と、11時には引き返すと決めていました。が、思いのほか早い時間に着け

最後は超難所?!



ました。それでも標準タイム(1時間40分)より、間オーパー。
標識には右手に「硫黄岳」、左手はハイマツの中を「峰の松目」。硫黄岳へ向かう登山道をちよつと進んだところにオーレン小屋へ降りていく登山道が分かれていました。

硫黄岳へ向かう登山道は砂地で正面に大きな岩が折り重なつて聳えています。登山道はこの岩壁を縫うようにつけられていて、急ですべりやすいものの、赤岳のクサリやハシゴに比べればまだ登りやすいかも・・・と思つていたのは甘かった!?最後に大きな岩が覆いかぶさるような岩場はひとりがやつと通れるような幅で、しかも右端が切れ落ちています!高所恐怖症気味の人間にとつてはブルブルと青くなるどころ。目をつぶりたくなるような思いをしながら必死で通り抜けました!やつとゴロゴロの石と岩の広い平地に出てそのすぐ先に硫黄岳山頂のケルンがたつていました。午前10時20分、硫黄岳山頂のケルン着。風強し!
山頂から赤岳方面を望むと岩と石の丘に横岳から赤岳へ

メシ屋敷



向かう登山道が3つのケルンに沿つて続いています。その先に八ヶ岳の最高峰・赤岳が見えます。その隣に阿弥陀岳はるか雲の向こうに富士山。振り返ると北八ヶ岳の峰々が一望できました。その遙かかなた雲の中に雪をかぶつた北アルプスの峰々が浮かんでいきます。諏訪の町と諏訪湖もうつすらと。

景色を堪能して下山しました。あのグルグルの岩場は、違うルートがあり、半分位は通らずに済んでひと安心?赤岩の頭から同じ道を下ります。こんな急だつたっけ?と、思いながらも、ひたすら下り13時20分赤岳鉱泉着。小屋の食堂で遅い昼食はラーメンとカレー。美味しかった。
帰りは北沢沿いの登山道を快調に・・・とはいかず、膝の痛みをかばいながら、最後はピョコタンピョコタンと下り、やつと林道へ。そこから1時間弱で駐車場着。
美濃戸口にできたカフェで早めの夕飯♪食事も美味しくさらにテイラミスが絶品で。「今度はこれを食べに来るだけでもいいか」と思うほど。最後のメシで充実の硫黄岳登山となりました!

渡嘉敷先生の歩く植物図鑑

NO.55 シュウメイギク

風に乗って飛散し、典型的な風散布、である。紅紫色の花が多く見られるが、白色の品種や倭性種も普及している。

①おもな園芸品種

- ・ブレッシングガムーグロウ
- ・紅色で半八重
- ・レディーギルマー
- ・桃色大輪の八重
- ・クイーンシャーロット
- ・桃色の一重
- ・ホワイトウインド
- ・白色で半八重
- ・ホワイトクイーン
- ・白色大輪の一重

②植栽

- ・地植では長い地下茎を伸ばして繁殖する。
- ・植え付けたら数年は掘り上げずにおく。株分けは早春に行う。
- ・鉢植えでも地下茎から多数枝を出す。
- ・耐寒性強く、20℃に耐えられる。
- ・土を特に好む性質ではないが、できれば腐葉土がよく、中性土が好ましい。
- ・肥沃でやや湿気の多い土壤に適する。



秋に爽やかな花を開くことから、和名の意味は秋明菊である。また京都府山城の貴船山に多いのでキブネギクとも言われている。蒴片が花弁状で花径が大きく、いかにもキクのように、名は「菊」を冠するけれども、シュウメイギクはキンポウゲ科のアネモネの仲間、キク科とは何の関係もない。山野で早春に可憐な花を開いているアズマイチゲ、キクザキイチゲ、ニリンソウなどの、イチリンソウ属に含まれる。
英名は Japanese anemone で、また学名も var. japonic になつているが、原種は日本にはなく、原産地は南ヨーロッパ、地中海沿岸である。わが国には、室町時代に中国から渡来したものと、しばしば逸出して野生化しており、貴船山に多くみられるのも、その一つである。
普通果実をつけないが、稀に倒卵形の瘦果をつけ、0.6mmほどの小さな種子は、長い白毛に覆われている。まるで綿毛のようで軽く、種子はタンポポのように